

# 北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

No. 53 2019. 6

北大総合博物館ボランティアの会第17回総会、講演会および懇親会の報告		
および懇親会の報告	在田 一則	1
総合博物館館長就任にあたって	小澤 丈夫	3
半澤 洵先生小伝(1)		
ー「納豆博士」と呼ばれた農学者の青年時代ー	半澤 久	4
「古楽器でつづるバロックと映画音楽のマチネ」顛末記	村雲 雅志	8
アメリカ自然史博物館～ニューヨークで半年間の研究生生活～	吉田 純輝	9
長瀬町の埼玉県立自然の博物館見学記	星野 フサ	10
自己紹介と着任のご挨拶	首藤光太郎	11
トンギョの棲む川	久末 進一	12

## 総 会 報 告

### 北大総合博物館ボランティアの会第17回総会、講演会および懇親会の報告

会長 在田 一則

北大総合博物館ボランティアの会第17回総会および講演会が2019年5月24日(金)に総合博物館1階の「知の交流コーナー」で開催されました。講演会に引き続き、2階のボランティア控室(S224C)において懇親会が行われました。

以下、簡単に報告いたします。

#### 総会 (13:30～14:00)

総会は24名が参加して、星野フサさんの司会で行われました。会長挨拶の後、以下の2018年度活動報告および2019年度活動計画の提案があり、承認されました。

#### 1. 2018年度活動報告 (2018年4月1日～2019年3月31日)

##### (1) ボランティア ニュース (通常号4回)

第49号 (10ページ、2018年6月1日発行)

第50号 (12ページ、2018年9月1日発行)

第51号 (12ページ、2018年12月1日発行)

第52号 (12ページ、2019年3月1日)

を発行した。毎号300部ほど印刷し、各グループに配布するとともに、総合博物館1階受付や北大

正門の北大インフォメーションセンター「エルムの森」にも置いている。また、新たに北海道大学東京オフィス(東京駅日本橋口 サピアタワー10F)にも置いている。

#### (2) ボランティアグループ連絡会

適時、金曜日の午後1時からS224で開催した。

#### (3) ボランティア ニュース編集委員会

適時編集委員会を開催した。年4回の定期発行を維持している。好評の「〇〇先生小伝シリーズ」は「高倉新一郎小伝一息子が語る高倉新一郎」をご子息の高倉嗣昌さん(公益財団法人ふきのとう文庫代表理事)に4回にわたりご執筆いただいた。

#### (4) その他

第16回総会、講演会および懇親会を2018年5月25日に行った。

講演会講師：安藤 厚氏(北大名誉教授、

文学部)

演題：プロニスワフ・ピウスツキ没後百年～ポーランド、サハリン、北海道～

(5) 各グループの活動

植物・菌類、昆虫、考古学、メディア、化石、北大の歴史、展示解説、翻訳、平成遠友夜学校、4Dシアター、チェンバロ、図書、第2農場、ハンズオン、展示制作支援、きたみてガーデンの16グループ、延べ約250名のボランティアが各グループ指導教員のもとで活動している。

2. 2019年度（2019年4月～2020年3月）の活動予定  
今後も各指導教員のもとでグループ活動をさらに進めるとともにボランティアどうしの交流を深める。

(1) 全体の活動

勉強会（談話会・博物館へ押しかけよう会など）・懇親会を適時開催する。

第26回博物館に押しかけよう会は、6月5日（水）月形樺戸博物館の予定。

第34回談話会は7月5日（金）「日本の叙情歌・詩の朗読とポプラチェンバロの響き～童謡100年に寄せて～」の予定

(2) ボランティア ニュースの発行

年4回の定期発行を維持する。「〇〇先生小伝」シリーズは、次号（No. 53、6月発行）から

「半澤 洵先生小伝」をお孫さんの半澤 久さん（北海道科学大学名誉教授）の執筆により掲載する。

3. 2019年度の体制

(1) グループ連絡会メンバー

在田一則（会長）・星野フサ（事務局長、植物・菌類、図書）・志津木真理子（昆虫）・沼田勇美（図書）・寺西辰郎（歴史、展示改訂）・今井久益・石田多香子（第2農場、植物・菌類）・新妻美紀（チェンバロ）・大山圭也（平成遠友夜学校、第2農場）・山田大隆（メディア、図書）・（展示解説）・（考古学）・（翻訳）・（化石）・（4Dシアター）・（ハンズオン）・（きたみてガーデン）  
グループ連絡会は定例として毎月第3金曜日13:00からボランティア室で開催する。どなたでも参加できます。

(2) ボランティア・ニュース編集委員会

星野フサ（委員長）・今井久益・大山圭也・久末進一・沼田勇美・山岸博子・石川満寿夫（顧問）

講演会（14:15～16:10） 総会と同会場

講師：藤田正一名誉教授（北大総合博物館前館長）

演題：札幌遠友夜学校閉校125年

～その現代に意味するもの～

懇親会

講演に引き続き、ボランティア室（2階 S224）において、講師の藤田さんほか13名が参加して楽しく歓談した。



## 失われた川を尋ねて 『水の都』札幌

日時：2019年4月27日(土)  
～6月16日(日)  
10:00～17:00  
(6月の金曜日は、21:00迄)

場所：北大総合博物館  
1階 企画展示室

(制作：谷地中大介 北大総合博物館係長)

## 新館長就任

## 総合博物館館長就任にあたって

北大総合博物館館長 小澤 丈夫

本年4月に中川光弘前館長の後任として、第8代目北海道大学総合博物館館長職を拝命しました。所属は工学研究院、専門は建築デザインです。就任にあたり、自己紹介とご挨拶をさせていただきます。

生まれは兵庫県芦屋市です。幼少時に、外科医であった父親の研修でドイツのデュッセルドルフに2年暮らしました。ソーセージ、キャベツの酢漬、ジャガイモ料理などは、母親が食卓によく並べてくれたおかげで今でも大好物です。帰国後は、兵庫県宝塚市に暮らし、神戸市にあるイエズス会の中学高校に通いました。高校生の際に建築の道を志し、東京工業大学に進学しました。国内外に知られる建築家篠原一男先生と坂本一成先生の研究室で、建築設計の理念について論理的に考え、いかに設計コンセプトを組み立て、建築をかたちにするかについて学びました。工学部ながら、かなり文系的な側面が強い専門分野です。東工大修士課程では、チューリッヒ工科大学で1年間学ぶ機会も得ました。その後、大手建設会社大林組設計本部で、意匠設計実務に没頭した6年余を経て、今度はオランダに渡りました。チューリッヒ留学中に講義を受け、強い感銘を受けたオランダ人建築家ヘルマン・ヘルツベルハーが、アムステルダムに創設したベルラーへ建築研究所の門を叩くためです。オランダでは、1990年代の好景気に湧く中、幸運にもヘルツベルハー建築設計事務所、足掛け5年に渡る設計実務に主体的に携わる機会も得ました。30代半ばに独立と帰国を決心、神戸と妻の出身地宮崎を拠点に、妻と二人で設計事務所を開設しました。2005年に再び大きな転機が訪れます。北海道大学で、建築設計実務をベースにした建築デザインの教育・研究に携わる機会を得ることになり、札幌に移り現在に至っています。

自分でも、よくこれだけ動きまわってきたと思います。特に、建設会社の職を辞しオランダに居を移した際には、多くもない貯金を懐に、妻と二人でスーツケースだけで渡ったようなものでした。随分と思いついて無謀なことをしたように見えますが、



小澤 丈夫 (おざわ たけお)  
北海道大学  
大学院工学研究院  
建築デザイン学研究室  
教授

専門分野：建築意匠学、  
建築設計

<https://5ko201604.wixsite.com/5-historyanddesign>

当時、不安よりも将来への夢と希望に溢れていたように記憶しています。振り返ってみると、先生・先輩・友人など、多くの素晴らしい出会いに恵まれ、励ましを受けることで、様々なことが一本の線となり繋がってきたように思われます。

2012年度から、総長室構成員として、学内歴史的資産の調査、保存活用に関する企画・立案に本格的に携わるようになりました。総合博物館の耐震改修やバリアフリー化に関わらせて頂く機会を通じて、スタッフの皆さんが総合博物館に寄せる想いと熱意には強い感銘を受けました。

私は博物館学には全くの素人ですが、この度の館長職拝命にあたり、広い視野を持って全学運営の中に総合博物館を再度位置づけ、ハード・ソフト両面のバランスが取れた運営を実現することが、与えられた使命ではないかと考えています。本博物館の運営は、専任・兼任教職員の他、60名程の資料部研究員、250名程のボランティアスタッフらに支えられ、2018年度には来館者年間22万人を超えるに至りました。このような人の繋がりや熱意は、他の大学博物館には見られない強みです。1999年4月に開館した本総合博物館は、今年で創設20周年を迎えます。また、本総合博物館がある旧理学部本館は、1929年11月に竣工した歴史的建造物で築90年を迎えます。この節目に、皆さんと力を合わせ、北大総合博物館の将来像を見据え、行政・民間・地域と幅広い連携を図り、永く広く親しまれる北海道大学の顔をつくっていきたいと思います。

## 半澤 洵先生小伝（1）－「納豆博士」と呼ばれた農学者の青年時代－

北海道科学大学 名誉教授 半澤 久

## 1. はじめに

札幌農学校を卒業し、北海道帝国大学農学部に応用菌学講座を創設し初代教授となった半澤 洵（じゅん）について、21 人いる洵の孫のひとりとして書くことになり、いまからほぼ 70 年前から 24 年間に祖父洵とともに暮らした頃のことを思い出している。私が祖父と暮らしていたのは、祖父が 70 歳以降のことである。

洵が、「納豆博士」と呼ばれるようになったことや新渡戸稲造博士が創立した「遠友夜学校」にその開校から閉校まで 50 年間に亘り関与したことなどを含め、祖父洵の 70 歳までの足跡については資料や文献に頼りながら記すことになる。特に、中浜康光氏と郷原康一氏がそれぞれ著された文献<sup>1), 2)</sup>や札幌市白石区老人クラブ連合会編『白石歴史物語』<sup>3)</sup>、そして北海道大学大学文書館が所蔵している洵に関連する資料や写真などは、貴重かつ具体的な記録である。それらから、私自身が祖父のことを再認識でき、本小伝作成のために多くを引用した。

## 2. 伊達白石藩士の子として誕生

洵の祖父半澤時雍、父時中親子は伊達藩の支藩白石藩主片倉小十郎邦憲の藩士であった。その宮城の白石から北海道に移住したのは、1871（明治 4）年である。時中は、1853（安政元）年生まれで当時 18 歳である。

伊達藩は、戊辰戦争で奥羽列藩同盟として明治新政府軍と戦い敗れ、藩士は士分を失い、生計の道がおぼつかない状況であった。伊達藩では、その窮状を打開するため、当時明治政府が推進して

いた北海道開拓へ向け家臣団を移住させることとなった。先陣を切ったのは現在の北海道伊達市地域への移住、そして第二陣として石狩地域（当時は最月寒と呼ばれていたが、移住した 1871 年に白石村と命名された）への移住が行われた<sup>1), 2), 3)</sup>。

洵の父時中ら石狩地域へ移住する片倉家の家臣達は、明治政府から北海道移住開拓使貫属（士族の身分を持って開拓使に所属）に任命され、開拓に従事することとなり、旅費などは政府から支給される事となった。そうして時雍、時中父子は、現在の札幌市白石区地域へ入植したのである。

それまでの道のりは、苦難の連続であった。宮城の白石から、家臣団 157 戸家族総勢 604 人が 2 班にわかれて出航した。海路函館へ向い、第一班（398 人）と第二班（206 人）は、函館で合流した。実は、第一班の乗船咸臨丸は、函館から小樽へ向け出航した直後に沖合いで座礁した。乗員は全員なんとか無事救助されて、函館に陸路で戻っていた。その後第二班と合流し、その乗船庚午丸で函館を出港して小樽に上陸し、さらに陸路で張碓、

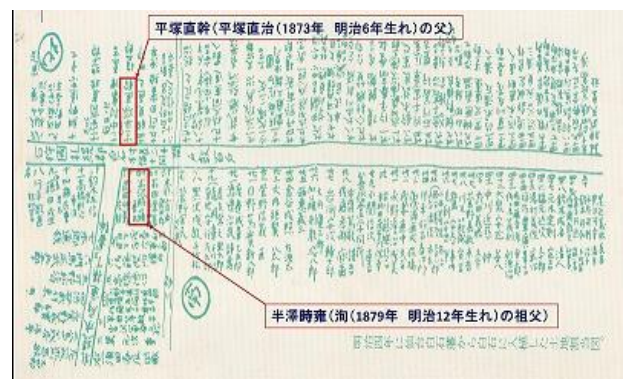


図 1 1871 (明治 4) 年に白石藩から石狩国札幌郡白石村に入植した 100 戸の土地割当図<sup>3)</sup>

\*タイトル「半澤 洵先生小伝」は、編集委員会による。

\*半澤 久：1948(昭和 23)年札幌生まれ。1973(昭和 48)年 北海道大学大学院工学研究科 衛生工学専攻修士課程修了後、2003(平成 15)年まで 株式会社竹中工務店技術研究所勤務。その間 1984(昭和 59)年～1986(昭和 61)年 デンマーク工科大学 暖房空調研究所客員研究員。2003(平成 15)年～2016(平成 28)年 北海道工業大学(現北海道科学大学)工学部建築学科教授。祖父半澤 洵が札幌遠友夜学校第 3 代校長であった縁で現在 2018(平成 30)年設立の札幌遠友会再興塾会長。

銭函から石狩を經由して札幌郡白石村に到着した。家臣団のうち 100 戸が白石村に入植し、残りの 57 戸は手稲村に入植した<sup>1), 2), 3)</sup>。このとき白石村に入植した中に、洵より 6 歳年上で札幌農学校での先輩であり、さらに生涯に亘り洵の活動に対して物心両面から大きな支援をした平塚直治氏（元帝國製麻会社役員）(1873(明治 6) 年～1946(昭和 21) 年)の父である平塚直幹氏がいた（図 1）。

洵は、そうした境遇の中で父時中と平井家から嫁いだ母加代の第二子で長男として 1879(明治 12) 年 1 月 9 日に白石村で誕生した。洵には姉がひとりと妹が 3 人いて、男子は洵ひとりであった。

### 3. 小学校から札幌農学校へ

時中は、洵が生れた 1879 年から開拓使勤務であった。1882(明治 15) 年には、家族は現在の札幌市中央区南 2 条東 4 丁目に転居した<sup>2)</sup>。洵は、ここから創成小学校（現在の札幌市資生館小学校の前身）に通い、1892(明治 25) 年に 13 歳で創成高等小学校を卒業し、ただちに札幌農学校予科 19 期生として入学をした。ここで洵は、当時米国とドイツ留学から帰国し札幌農学校の新進の教授となった新渡戸稲造博士 31 歳と出会ったのである。



写真 1 札幌農学校予科卒業記念（1897 年）  
前列左から 2 人目半澤 洵、2 列目左から 2 人目新渡戸稲造博士、3 列目左から 4 人目有島武郎（星野勇三旧蔵写真帖、北大文書館所蔵よりトリミング）



写真 2 ピヤソン夫人聖書講義出席者記念（1898 年）  
前列左から 2 人目半澤 洵、2 列目左端森本厚吉、3 人目ピアソン夫人、5 人目有島武郎、右端星野勇三（星野勇三旧蔵写真帖、北大文書館所蔵よりトリミング）

現在なら中学校入学の年齢のときから新渡戸博士の薫陶を受けたのである。農学校予科の同期生には、有島武郎、星野勇三、森本厚吉らがいた（写真 1、2）。

また、教授陣には、佐藤昌介、宮部金吾、大島金太郎など札幌農学校初期の輝かしい歴史を築いた俊才達が揃っていた。洵は、そうした環境の中で勉学に励み、また友人達との交流を深めていたと思われる。そして、新渡戸博士が「遠友夜学校」を創立したのは 1894(明治 27) 年の 6 月である。洵は当時 15 歳で、遠友夜学校の創立時から有島武郎ら同期生たちと共に同校の教師となっていた。弱冠 15 歳の少年たちにとって、新渡戸博士が提案し実践しようとした教育に対する理念は、非常に強く影響を与えるものであったことは想像に難くない。洵は、この遠友夜学校における新渡戸博士の教育の実践理念である「世の中のため、人のため」という考え方を、生涯の信条として持ち続け、そして自らも実践した。

有島武郎ら同期生との交友関係は、非常に厚いものがあつたと思われる。有島武郎の作品に「同級生」というのがある。これは、有島の札幌農学校時代の同期生について、彼の目を通しての姿が描かれている。

以下に、有島武郎全集 第 15 巻掲載「同級生」（筑摩書房）<sup>4)</sup> より一部を引用する。

「・・・で話替って此の大學に五人居る事は知らない人は知らないだらう。誰から槍玉に擧げられるかな・・・兎に角此の五人の事を「ぬるま湯

窯」と云う因縁を知つて居る人があるかい。知らずば云つて聞かさうが、ぬるま湯と云うものは上ると寒いものだ。五人の餓鬼も御扶持が上れば上る程寒い相だ……そんな湯になら這入らない方がいいなどとまぜ返してはいけない相だ。まぜつ返すと尚ほ寒くなるからな……中略……で、坊ちやんは相変らずおとなしくつて何かこちよこちよとやつて居る。シクロオーガニズムをいぢくつて居るとあゝなる者と見える。小児科の御醫者様が、いやににたにたするのと同じ原則に従ふものだらう。一寸例へてみれば同級會があつた晩でも唯は歸らぬ。サイダーの栓の裏を引つぱがして、コルクが黒くなつて居るのを見るとやたらに幾個でもポケットの中に押込んで行く。而して其の翌々日位先生の教室の黒板には、シクロコックス、サイダリイとか書いてあつて。生徒が手ぐすね引いてそれをノートダウンすると云う話だ（話だよ）何しろ坊ちやんの教室はかび臭いもんだ。其の中に端然と構へてアニリン色素か何かをいぢくり廻して居る處は、天晴れ植物學者の謀叛人だ。従つて化學の殉教者だ。そら見給へ物には何時でも二面がある。スキフトのアカデミー・オヴ・ラガド<sup>5)</sup>と云うものをやらされたつけなあ。坊ちやんのやつて居る事は、あすこいらから來たものではないかと思はれる。いまに胡瓜から日光が取れないとも限らないよ。諸君は坊ちやんの雑草學と云う本を讀んだ事があるか、讀まなかつたら讀み給へ、買はなかつたら買ひ給へ。あれは坊ちやんが植物學に永遠の訣別をする記念の出版で、マダム・ローランが首を切られたる前に慨然として「あゝ自由よ、汝の名によりて如何なる悪事かなされしぞ」と師子吼したのと同じ調子の本だ相だ。悲壯な本ではないか。

以上、有島武郎「同級生」より一部を原文のまま引用。文末に明治44(1911)年4月23日の日付が記されている。

この作品の中で、洵は「坊ちゃん」のニックネームで記されている。探究心旺盛で研究熱心な様子を面白おかしく皮肉も交えながら、そして同期生ならではの遠慮のなさや友情を込めて描かれている。当時、若き研究者であつた洵の日常の一端をうかがい知ることができる貴重な作品である。

このような文章を書いた有島への洵の友情はとても厚いものがあつたと思われる。というのは、私が祖父洵から有島の話聞いたのは、記憶する限りでは一度だけであつたが、それは私が小学生の頃に新聞であつたか、たまたま有島のことが書かれていたのを見たときだつたと思う。そのとき祖父は、有島があまりにも早くに亡くなったことをとても惜しんでいた。そしてよき友であつたことを私に話してくれた。

#### 4. 農学研究者の道へ

洵は、1901(明治34)年7月に札幌農学校本科を卒業し、洵の生涯の恩師となる宮部金吾教授の下で植物病理学を専攻し研究者の道を歩み始めた。翌1902(明治35)年3月には札幌農学校助教授に任命された。さらに1904(明治37)年には北里柴三郎博士の伝染病研究所で学ぶ機会を得た。この時に志賀 潔博士の知遇を得た。1907(明治40)年に札幌農学校は東北帝国大学農科大学に改称した。この年に洵は、「応用菌学」の講義を開講した(写真3)。

そうした中で、1911(明治44)年に宮部教授から新たな研究分野であつた「応用菌学」の講座開設のためドイツ、フランスなどヨーロッパ各国へ応用菌学研究のための留学を命じられた。

洵が著書『雑草學』<sup>6)</sup>を出版したのは、留学出発の前年1910(明治43)年1月であつた。この著書の中に掲載した植物の図版いわゆる植物画の大半は洵自身が描画したものである(図1、2)。



写真3 植物学教室メンバー(1908年6月)  
前列左から2人目宮部金吾教授、後列左端半澤 洵  
(宮部金吾旧蔵写真、北大植物園所蔵)



図1 洵の著書  
『雑草學』中表紙  
(1910年1月)



写真4 東海林氏結婚ヲ期トシ同級生家族集合記念撮影  
(1910年)後列左から半澤、有島、星野、渡部、東海林、  
木幡、森、石澤、井口、森本、蠣崎 前列は各夫人左  
から星野、有島、井口、東海林、森本、森、蠣崎、木  
幡、石澤 (星野勇三旧蔵写真帖、北大文書館所蔵)



図2 洵の描いた雑草  
左図はトウダイグサ属、右図はタンポポ属(左:なみたん  
ぽぽ、右:せいやうたんぽぽ) 右図は著書『雑草學』  
に用いた図版原図。(北大文書館所蔵)

私が子供の頃に植物画や顕微鏡で見た標本の図などの原画をみた事があったが、それらは非常に細密に描かれ、多くは彩色されていて美しいと思った覚えがある。

このような経緯があったので、先に引用した有島武郎作の「同級生」にある「あれは坊ちやんが植物學に永遠の訣別をする記念の出版」といった表現が生れたのではないかと推察する。洵自身の心境をいまとなっては確かめることは出来ないが。

ちょうどその頃(1910年)に、同期生東海林氏の結婚に際して皆夫人同伴で集まり集合写真を撮っている。洵の肩に有島が、有島の肩に星野が手を添えているのがわかる。この時、洵の妻美加は3人目の子で長男の道郎(筆者の伯父)が生まれた後で欠席している(写真4)。

そうして、いよいよ1911(明治44)年12月6日に在京の知人や志賀潔博士らに見送られ、ドイツをはじめヨーロッパ各国への留学のため横浜港からフランスのマルセイユへ向け出航した<sup>7)</sup>。

(続く)

#### 参考文献・引用文献

- 1) 中浜康光(1967)祝白石中学校開校20周年 札幌・白石開拓史—北海道開拓使貫属考一. 札幌市立白石中学校開校20周年記念事業協賛会, 1967年10月再版.
- 2) 郷原康一(2007)半澤 洵の生涯～白石に誕生した納豆博士～. 平成19年度白石区特別講座 白石を学ぶII 文化編, 白石区民センター運営委員会主催, 2007年9月1日.
- 3) 札幌市白石区老人クラブ連合会編(1978)白石歴史物語. 1978年.
- 4) 有島武郎(2002)同級生. 有島武郎全集 第15巻, 筑摩書房, 2002年8月.
- 5) Jonathan Swift (1726) Gulliver's Travels. 中野好夫訳「ガリヴァ旅行記」. 新潮文庫, 1992年, 第3篇 第5章に, 都市「Lagado (ラガドー)」にある研究所でのガリヴァの体験談のところに以下の様な研究についての挿話がある。  
“extract sunbeams out of cucumbers” (胡瓜から日光を抽出する)
- 6) 半澤 洵(1910) 雑草學. 東京合資会社六盟館.
- 7) 半澤 洵(1911) 「留学日記」(1911年12月から記録). 北大文書館所蔵.

ポプラチェンバロ・コンサート報告

「古楽器でつづるバロックと映画音楽のマチネ」 顛末記

市立釧路総合病院 村雲 雅志（北大医学部 1984 年度卒）

40 年前、北大構内。新入生の私。中央道路沿いに、ポプラの巨木がそびえていた。幹が黒い。新緑と青空との鮮やかなコントラスト。

「このポプラは黒ポプラという種類で、学名は *Populus nigra* と言います」とラテン語の T 先生。そのあたりで授業を脱落し、単位は取れなかった。

パソコンも、インターネットも、携帯電話もなかった頃。映画は重要な娯楽だった。安い名画座もあったが、封切を観に行くために食費を削ったりしたものだ。生協食堂のカレーライス(150 円!)にはお世話になった。

理学部（現在の総合博物館）の建物に初めて入ったのは、サークルの先輩へ楽譜を届けに来た時だ。構内の歴史的建造物が味気ない建物に替わっていく中で、理学部は違った。重厚な外観、美しく装飾された螺旋階段の手すり。またがって滑ってみたのは言うまでもない。

研究室を覗くと、山積みの段ボール箱と実験器具がいまにも崩れそうな中、洗濯物や汚れた鍋が点在していた。人が使うとは思いたくない寝袋も。「野外での研究が多いから、どんな環境でも過ごすための訓練だよ」という説明が嘘であることは明白だったが、「箱の中身は世界的に貴重なんだ」という言葉は本当だった。現に博物館資料として立派に展示されているのだから！

40 年を経て、美しく整備された博物館に足を踏み入れる。磨かれた手すり。さすがに滑る勇気はない。腰痛もあるし。巨大なポプラは失われたが、そのぶん梢で隠れていた空が広がった。先人たちの英知が、北大を飛び出し、空に向かって広がっていくように思える。あのポプラは美しいチェンバロとして蘇った。プロジェクトを企画された故・市川信一郎さん、そして製作の横田誠三さんとは、古楽器を通じて御縁があった。札幌を離れて久しいが、此方で北大と縁の深い広重真人さんと知り合い、学生時代の知己・野中敏明さんとも再会した。3 人だけだと「おじさんバンド」だが、

ボランティアの野村さおりさんと御縁があって、博物館での演奏につながった。ついでに「レゾゾン *Les Ojisans*」という命名も。

私たちが使うのは古楽器だが、私たちの中にある多様な音楽を演奏することにためらいはない。昔の人だって最先端の音楽をやっていたのだ。コンサート後半は、お客さんと一緒に楽しめる音楽にしよう。なにより企画している私たち自身が楽しんでいる。候補を挙げていくと、自然に映画音楽になった。音楽は鮮烈な記憶を呼び起こすだろう。だが楽譜はない。コンサートまであと 1 か月。アレンジはすべて広重真人氏に委ねられることになった。

コンサート当日。こんなはずじゃなかった。開演前からお客様の長蛇の列。大慌てで追加の椅子を並べる。皆が場内整理係に変身。ありがとう、そして、ごめんなさい。

演奏開始。最前列の熟年カップルが目頭を押さえている。音楽が心の琴線に触れている。音楽は演奏者と聴衆のあいだに大きく膨らんで、生きているかのように息づいている。ここで演奏できて良かった、音楽をやってきて良かったと思った瞬間、私の涙腺も緩んでしまった。

皆様の多大な御尽力に心から感謝申し上げます。この続きは、またいつかどこかで。



右から、広重真人さん(バロックヴァイオリン)  
村雲雅志さん(ヴィオラ・ダ・ガンバ、リコーダー、筆者)  
野村さおりさん(チェンバロ) 野中敏明さん(チェロ)



## 活動報告

## アメリカ自然史博物館 ～ニューヨークで半年間の研究生活～

北大大学院理学院 博士課程 吉田 純輝

自由の女神、ブロードウェイ、セントラルパーク、ワールドトレードセンター。皆さんはニューヨークと聞いてどんな場所を思い浮かべますか？

普段私は札幌にいて、小林快次先生の研究室で博士課程の学生として、恐竜化石を中心に脊椎動物の進化を研究しています。2018年6～12月までの約半年間はニューヨークのアメリカ自然史博物館を拠点として研究活動を行っていました。そこは映画「ナイトミュージアム」の舞台にもなった、ニューヨークを代表する場所の一つです。日本で小林先生から言われたことは「あの博物館は厳しくてドライな研究環境。そこで世界をもっと知ったほうがいい。」でした。そんな場所で過ごす半年間に不安と期待を抱え、眩しいマンハッタン島に着陸しました。

アメリカ自然史博物館は北米で唯一、大学院をもつ博物館で、お世話になるマーク・ノレル先生も永く恐竜研究の最先端を走ってきた研究者です。たくさんの職員・学生・ポスドクがいて、国籍も多様で、みんなの名前を覚えるのにも少し苦労しました。さらに、スタッフにもコレクションマネージャーだけでなく、CT スキャンや 3D プリンターを扱う人や、論文に掲載する写真撮影や復元画をつくるアーティスト、化石をクリーニングするプレパレーターなど多様なスタッフがいて、研究を加速させる組織構成が印象的でした。充実した研究環境は、研究できない「言い訳」をさせない場所でもあります。仲良しグループというより個々の学生が自身の研究に専念している印象が強くて、小林先生の言っていたことを思い出しました。

でも彼らは決して「嫌な人たち」ではありませんでした。彼らと共にワイオミング州での発掘調査、飲み会や博物館で開かれるパーティに加え、毎週の外部の研究者を招いたセミナーなどたくさんの機会に恵まれました。結果的に、自身の研究活動に重要な情報を得ることもできました。

アメリカ自然史博物館が 100 年以上収集し続け、保存してきた、3300 万点以上の膨大なコレクションには日本では観察できない動物・化石標本も含まれます。この“言い訳できない環境”では、自身で観察・分析して、自分のアイデアをどんどん試すことができます。「もの」があるだけで、ここまで研究が進むのかと思うこともたくさんありました。収蔵庫でたくさんの標本を観察し、気づき、考え、発見し、ノレル先生らと議論できたことは私にとって大変重要な時間でした。

半年間を通して感じたことは、札幌もニューヨークも博物館には「ひと」が大事です。北大博物館では、先生、学生、ボランティアの方々などの「ひと」に支えられて、私は研究できています。ニューヨークでも研究成果があげられたのは、先人たちが収集してきた圧倒的な質と量の標本と、受入研究室のノレル先生や学生・スタッフの方の助力をいただけたからです。

時々、映画やテレビにニューヨークが映るとアメリカ自然史博物館にいた半年間を思い浮かべます。ニューヨーク生活は「楽しい！」と家族や友人には言いつつも、札幌の生活より大変なこともありました。それでも私にとって多くのチャンス、活発な人に出会えて、自分の世界が広がる場所でした。居心地も良くなった頃に去るのは悩ましかったけど、いま札幌へ戻り研究を続けています。



アメリカ自然史博物館館内でのクリスマスパーティー

## 活動報告

## 長瀬町の埼玉県立自然の博物館見学記

植物・菌類・図書ボランティア 星野フサ

北大総合博物館 3 階に哺乳類束柱目の全身骨格が 2 つ展示されている。一つはロシアのサハリン州（樺太）産出のデスモスチルスで中新世前期～中期に生息していた。もう一つは北海道東部の足寄町から産出した後期漸新世のアショロアでデスモスチルスよりも古い時代に浅瀬で生息していた。

一昨年の 6 月、かつてデスモスチルスと同じ時代にその仲間（パレオパラドキシア）が生息していた埼玉県の秩父地方を郷里とする元小学校校長が、秩父盆地内の長瀬町にある埼玉県立自然の博物館とその周辺の荒川流域を案内して下さった。

人口約 7,000 人の長瀬町は日本の地質学発祥の地として知られているが、桜の名所でもある。訪れた日は開花宣言に一日早く、桜はまだ蕾だった。

明治初期の 1878（明治 11）年、東京帝国大学地質学科の初代教授ナウマンは長瀬を地質調査し、翌年第 1 期生の小藤文次郎が卒業研究で群馬県の下仁田から長瀬にかけて地質調査をした。それ以来長瀬は日本地質学発祥の地と呼ばれるようになった。1916（大正 5）年に盛岡高等農林学校 2 年の宮沢賢治が地質見学旅行に秩父を訪れている。

埼玉県自然の博物館は荒川沿いの結晶片岩が形づくる景勝地にあり、そこから見える荒川の上流部には何段もの河成段丘が形成されていた。

自然の博物館の周辺には、旭川近くの神居古潭峡谷にも見られる結晶片岩の大きな石畳が続き、荒川の浸食により美しい景観を見せている。結晶片岩の様々な色による縞模様が美しい石畳は天然記念物に指定され、川船による川下りやカヌーを楽しむ観光客もいた。土手には日本地質学発祥の地の巨大な碑があり、私たちを見下ろしていた。

日本列島はかつて大陸東縁の一部であったが、おおよそ 2,000 万年前頃から始まった日本海の拡大に伴い大陸から切り離された。現在秩父盆地の西に連なる関東山地は、その当時一つの島で、その東縁には浅い海が広がっていた。この海（古秩父湾と呼ばれる）は約 1,700 万年前に誕生し、約

1,500 万年前に消滅した。古秩父湾に生息した海棲哺乳類化石群の中で、最も代表的な標本がパレオパラドキシアである。秩父鉄道の蒸気機関車「パレオエクスプレス」は、パレオパラドキシアがその名前の由来である。秩父盆地からは 7 地点より、全身骨格標本 2 標本を含む 7 標本が発見されており、世界で最もパレオパラドキシア化石が発見されている場所であると言われている

パレオパラドキシアとデスモスチルスは同時代の束柱目であるが、前者は暖かい海に、後者はサハリンや北海道のような寒い海に棲んでいた。

博物館の 1 階には、カルカロドン・メガロドンと名付けられた中新世～鮮新世の暖かい海に生息した大きなサメの一種が天井近くを泳いでいた。

札幌に戻り地学団体研究会の懇親会である研究者は長瀬で拾ったノジュールにメガロドンの歯（俗に「天狗の爪」と呼ばれる）が入っていてびっくりしたという。また、別の研究者は 4 年前に長瀬で砂金を採取し感動したといていた。

その年の夏、この学会が旭川市で開催された。神居古潭峡谷の結晶片岩（神居古潭変成岩）が長瀬のもの（三波川変成岩）とどう違うか確かめたいと考えていたがかなわなかった。

なお、入場料は 200 円であった。



埼玉県立自然の博物館のパレオパラドキシア

## 着任挨拶

## 自己紹介と着任のご挨拶

北大総合博物館 研究部資料基礎研究系 助教 首藤光太郎

2019年4月に総合博物館に着任しました首藤光太郎と申します。植物（いわゆる陸上植物）の担当で、高橋英樹先生の後任となります。総合博物館では、講義や研究の他に、植物関係の展示や、植物標本庫の管理・運営に携わることになります。

出身は東京都世田谷区で、学生時代を福島大学で過ごし、2017年3月に博士号を取得しました(学部3年時に東日本大震災に被災し、人生が大きく変わりました)。その後2年間、新潟大学教育学部にポスドクとして勤めました。北海道には学会参加や現地調査等で数回の来訪経験がある程度で、従って北海道に分布する植物には詳しくなく、これから勉強を始めるところです。今は、外を歩くとたびになにか気づくことがある、楽しい毎日を送ることができています。例えば春の北大キャンパスの恵迪の森を歩くとアズマイチゲやキバナノアマナが目を引きまします。しかし、東北・中部地方ではこれらとよくセットで生えていたキクザキイチゲやオウレンなどは見られず、本州との違いを実感します。

専門は植物分類・系統学です。福島大学では、ツツジ科イチヤクソウ属で生じた菌従属栄養性の進化に注目した研究を行っていました。菌従属栄養とは、菌根菌に寄生する能力のことです。中にはギンリョウソウやオニノヤガラのように、光合成を行うことなく、菌従属栄養のみによって生育する植物もあり、これらは完全菌従属栄養植物と呼ばれます(かつては腐生植物とも呼ばれていました)。完全菌従属栄養植物は、近縁な緑葉植物と比べて特殊な形態・生態をもち、系統的にもかけ離れているため、進化過程の解明が難しい植物群であると言われてきました。一方でイチヤクソウ属には、普通葉をもち光合成と菌従属栄養を行う種と、葉が鱗片状に退化しほぼ完全菌従属栄養を行う種が含まれ、これらの間には葉のサイズなどに連続的な形態変異が見られます。完全菌従属栄養植物と近縁な緑葉植物の間に連続的な形態変異

が見られる例は珍しく、イチヤクソウ属は完全菌従属栄養植物の進化を詳しく追跡するのに適した研究材料であると考えています。奇遇なことに、前任の高橋先生もイチヤクソウ属を研究されていた時期がありました。高橋先生は、日本におけるイチヤクソウ属の研究という点においても、私の前任ということになります。総合博物館には、高橋先生が採集されたイチヤクソウ属の標本が多く収蔵されています。このような場所に着任できたことを、とても幸運に感じています。

新潟大学では、水生植物(水草)の植物相や調査法についての研究を行っていました。上記のイチヤクソウ属に加えて、学部4年時に卒業論文として福島県裏磐梯五色沼湖沼群の水草相をまとめて以来、水草の調査も得意分野です。水草は、水中に生えているため、採集や直接観察がときに困難で、陸上植物と同様の調査手法では満足な結果が得られないこともしばしばあります。従って、ゴムボートや専用の採集器具を使って調査を行います。将来的には、現地調査で採集した北海道に自生する水草を、生物標本展示室の水槽でお見せできるようにしたいと思います。

昭和63年生まれの若さを武器に、総合博物館を盛り上げていきたいと思えます。同時に、勝手にわからずご迷惑をおかけしてしまうこともあるかと思えますが、何卒よろしく願いいたします。



キュー王立植物園で標本調査中の筆者

活動報告

トンギョの棲む川

図書ボランティア 久末 進一

『春になると北大構内を流れる小川には、たくさんの子供たちが小さな網を手にはさくすくいに集まってきました。探しているのはいわゆるトンギョという魚で、これを数匹とっては空きびんに入れて持ち帰り、家で飼うのです。』と、子供欄の記事で紹介しているのは、押し葉標本作り古新聞の中の「北海タイムス」(昭和30年4月12日付)紙。

トンギョとは、メダカ並みの淡水産小魚で、記事解説者(元北大理学部動物学教室、山田真弓先生)によれば、トゲウオが訛ったものらしく、本名トミヨで「エゾトミヨ」と「イバラトミヨ」の二種類が一般に見られる。道内各地の小川や水草の繁った池や沼に群れて棲み、春から夏にかけて浅い泥底に水草の茎や根を支えにした、ほぼ球形の巣を作る。この作業は雄の役目で藻くずや枯枝などをせっせと集め、巣ができると、雌を誘い込む。雌は気にいった巣に入り、やがて卵を生む。産卵後も雄は巣を見張り、外敵から卵を守って、小さな身であれこれ奮闘努力するが、卵はかえると稚魚に成長するまで巣に棲み、稚魚になると巣を出るという。

トンギョの棲む北大構内の小川と言えば、「サクシュコトニ川」で、キャンパスの中を川が流れる大学なんてめったにない。

クラーク会館東側に湧き出す水は、藻岩浄水場からの放流水で、クラーク胸像や古河記念講堂脇の中央ローンを流れ、道路下をくぐって百年記念館と中央図書館脇を通り、弓道場横を流れていく。

川筋は一部が大野池につながり、エンレイソウや水芭蕉を育み、カモたちを遊ばせる。川は次に北大第一農場付近を通り、遺跡保存庭園横を流れ、

やがてエルムトンネル遊歩道沿いに恵迪寮横まで流れていく。その流れの終点は環状通の北18条通に至る暗渠である。

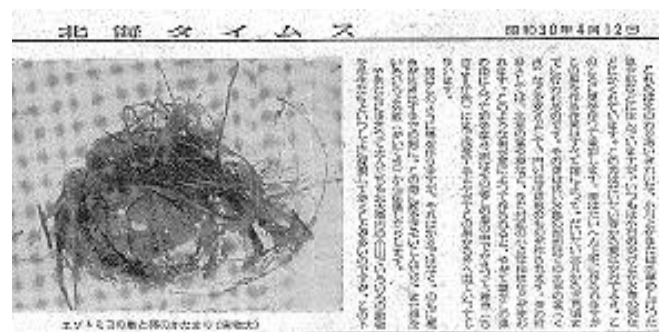
その名の通り、豊平川に近くコトニ(窪地)の琴似川に至る川で、昔はサケも遡ったと古老伝説もある。北大構内のトンギョの棲息地がこの川筋のどこかにあったわけである。

春から初夏へと緑を濃くする時期、金魚ならぬトンギョすくいの川遊びは季節の風物詩になっていた。古新聞の昭和30(1955)年記事は、はからずもトンギョの棲息を証明してくれたが、トンボもゲンゴロウも健在だが、トンギョは今、どうなっているか。

生い茂った水草の陰で、64年の歳月を元気に群れ泳いでいるだろうか。

開発や環境整備で川筋もあちこち変わった。川水の水量も減り、農薬や生活用水の混入で水質も昔より悪化したはずである。

昭和の子供たちが歓声と笑いで大はしゃぎ。ずぶ濡れで川の中を追ったトンギョすくいの楽しさを、令和の子供たちにも伝えることができるだろうか。



写真はエゾトミヨの巣と卵(昭和30年4月12日(火曜日)、北海タイムス、故山田真弓名誉教授の随筆「トンギョ」より)

北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース No. 53

- ◆編集人：北海道大学総合博物館ボランティアの会(編集委員：星野、今井、大山、沼田、久末、山岸)
- ◆発行人：在田一則
- ◆発行日：2019年6月1日
- ◆連絡先：〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 Tel: 011-706-2658
- ◆ボランティア ニュースは、博物館のホームページからもご覧になれます。

<https://www.museum.hokudai.ac.jp/lifelongeducation/volunteer/volunteernews/>